

与謝野寛・晶子と富士山

＜静岡県富士山世界遺産センター 学芸課 田代 一葉 准教授＞

富士山は、各時代の文学者たちによって数限りなく、そしてさまざまに表現されてきましたが、今回は近代文学を代表する歌人である与謝野寛・晶子夫妻と富士山の関わりを見てみましょう。

与謝野寛(後に鉄幹と号す)は、明治6(1873)年に京都市岡崎村(現在の京都市左京区岡崎)西本願寺支院願成寺に与謝野礼巖(れいごん)、ハツエの四男として生まれました。鹿児島や宇治、山口などを転々としたのち、明治32(1899)年26歳の時に、東京新詩社という短歌の結社を創立します。

一方の晶子(旧姓は鳳(ほう))は、大阪堺(現在の大阪府堺市)の菓子商の家に生まれ、『源氏物語』などの古典文学を愛読して少女時代を過ごし、旧派の短歌を詠むようになりますが、それには飽き足らない思いを抱いていた時に「読売新聞」に掲載された寛の短歌にふれ、これなら自分もできそうだと思い、雑誌『明星』を刊行する東京新詩社への活動へと接近していきます。

寛との大恋愛の末、23歳で駆け落ち同然で渋谷の寛の家で同居することになり、その後結婚し12人の子を産み育て(うち1人は夭逝)、生涯連れ添いました。

夫妻は、歌を詠むため(吟行)や各地にいる門人、支持者に会うため、講演や短冊などの揮毫により副収入を得るためなどの理由で、全国各地を巡っています。温泉を愛した二人は、熱海や伊東、一碧湖など伊豆を訪れることが多かったようで、確認できる静岡への訪問回数は40回を超えています(『与謝野晶子・寛 二人の旅』堺市立文化館 与謝野晶子文芸館、2013年)。

その中でもよく訪れている伊豆の三津(みと)では、洋画家の石井柏亭(明治15(1882)年-昭和33(1958)年)が夫妻の姿を描いています。(右図)昭和8(1933)年1月6日から4泊で与謝野夫妻が三津にある由井彦太郎氏の五松山荘に滞在した時に描かれたもので、寄り添う二人の後ろには早春の富士が聳(そび)えています。この絵は、寛の還暦を記念して刊行された『与謝野寛短歌全集』(明治書院、昭和8年)にも掲載されていて、夫妻ともに気に入っていたのでしょうか。



石井柏亭筆「伊豆三津における与謝野夫妻像」
(個人蔵・日本近代文学館寄託)

では、二人はどんな富士山を短歌に詠んでいるのでしょうか。

寛は、自らが主催する新詩社の短歌雑誌『冬柏』の昭和8年9月号に「三津遊草」(七)と題して富士山の歌16首を載せています。その中の一首、

大いなる富士を仰げば何事も我れ恕(ゆる)されてある心地する
の歌があります。「我れ恕されて」が何を指しているのかは直接には述べられていませんが、晶子の名声に比較して、もがけども空回りばかりの自分を、富士山は理解し広い心で大目に見てくれているのだということが詠まれているように思われます。このような自らの心を映す鏡として富士山を眺める歌が寛には幾首もあります。

晶子には、全集では88首の富士山詠があります。その中で晩年の昭和15年に詠まれた
富士の嶺に木花咲耶媛(このはなさくやひめ)いまし盛りになりぬ東海の春 (『白桜集』)
は、頂上に富士山の神である木花咲耶媛の姿がいらっしやり、その神に祝福されて盛りを迎えていく東海の春であるよ、との意味に取れます。

二人はほかにどのような富士山の歌を詠んでいるのでしょうか。歌集や全集などを紐解いてぜひお気に入りの一首を見つけてみて下さい。

参考文献:『鉄幹晶子全集』32巻・別巻8巻、勉誠出版、2001~2021年